

横浜

Yokohama Renaissance

ルネサンス

Number 20

特集

横浜の情熱映画人

Who's Who in YOKOHAMA

光邦さん

木村剛さん



横浜信用金庫

特集 横浜の情熱映画人

1897年(明治30)、中区住吉町にあった横浜港座で、シネマトグラフが上映されてから115年。以来一世紀以上にわたり、横浜の街は、映画を愛し愛されてきた。無国籍な雰囲気漂わせるロケーションは、数々の映画の舞台となり、港町横浜の名を日本中に広めた。現在でもこの街には映画に関わる人が多く住む。今回は、横浜で活動が続いている映画人を取り上げた。(写真はシネマ・ジャック&ベティの映写室)

A Table of Contents

目次/理事長ごあいさつ	2
特集 横浜の情熱映画人	
 別所哲也 俳優/プリリアショートショートシアター代表	4
世界とつながりながら、 地域に根ざすシアターづくり	
 中村高寛 横浜みなと映画祭プロデューサー/映画監督	6
映画の街としての 伊勢佐木町よ、再び	
 山岸謙太郎 やまけん組代表/映画監督	8
ボランティアチームで 自主制作映画を撮影	
 杉本暁子 映像制作者	10
完成後も撮影を続ける、 海岸通団地のドキュメント	
 植杉賢寿 シネマトークの会/弁士	12
言葉を添えることで 映画制作に立ち会える	
 鈴木たけし ヨコハマ映画祭実行委員会代表	14
映画好きによる、 映画好きのための映画祭	
横浜を詠む 水原紫苑 写真:矢部志保	16
Who's Who in YOKOHAMA	
 光邦 パーソナリティ	18
1対1の会話ができる、 他にはないラジオの魅力	
 木村剛 横浜市立桜丘高等学校教諭	20
社会貢献活動として 音楽イベントに関わる部活	
横浜の聴き方 第13回 中島久	22
『Once Upon a Time in YOKOHAMA』ダウン・タウン・ブギウギ・バンド 横浜ジェリービーンズ倶楽部通信	23

ごあいさつ

横浜信用金庫理事長
齋藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第20号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行としています。

本号では、特集「横浜の情熱映画人」と題して、さまざまな視点から横浜を舞台に映画活動をすすめる方々取材しました。

Who's Who in YOKOHAMAでは、FMヨコハマのパーソナリティ光邦さんと、横浜市立桜丘高等学校の木村剛先生をご紹介します。

第13回「横浜の聴き方」では、ダウン・タウン・ブギウギ・バンドの『Once Upon a Time in YOKOHAMA』を取り上げています。

『横浜ルネサンス』第20号、お楽しみいただければ幸いです。

世界とつながりながら 地域に根ざすシアターづくり

俳優／「ブリリアショートショートシアター」代表

別所哲也さん



横浜みなとみらいのショートフィルム専門映画館「ブリリア ショートショート シアター」では、10月1日から11月15日の期間、インドとドイツの作品を集めた2つのプログラムを上映。インドの文化や映像を語るトークイベントや、ラウンジでのヘナトゥーやインド古いの実施も。シアター内のカフェでは、インドフイン、インドビールその他、カレー味のポップコーン等を販売するなど、インドとドイツの文化を目と舌で味わえる。
URL: <http://www.bri lia-sst.jp/>

日本唯一のショートフィルム映画館

一般に30分前後の映画をショートフィルム(短編映画)という。短期間、低予算で制作できて、監督の持つ世界観やメッセージをストレートに表現できるから、世相や世界情勢がいち早く反映される。また映像の最新技術を試す場ともなる。

そんな短編映画専門の日本唯一の上映館が横浜にある。みなとみらい地区に2008年(平成20)にオープンした「ブリリアショートショートシアター」だ。開設したのは、俳優の別所哲也さん。1999年(平成11)、ショートフィルムに特化した映画祭「アメリカン・ショート・ショートフィルムフェスティバル」(現在の名称は「ショートショートフィルムフェスティバル & アジア」)を立ちあげ、ショートフィルムの魅力を二貫して訴えてきた情熱の映画人だ。「ショートフィルム」という言葉は日本でも定着したが、別所さんがその立役者なのである。

「映画は長さじゃない、わずか数分の中に監督の個性や感動が詰まっています、おもしろい。ルーカスやスピルバーグら大御所たちも、みんなショートフィルムで映像の道への第一歩を踏み出したんですよ。映像作家のスタート地点かな」

ハリウッドへのゲートウェイ映画祭

30代初め、ロサンゼルスでショートフィルムに劇的に出会い、帰国後、気の合う仲間と世界の映画祭のシステムや法律を勉強し、仕事の合間に渡米しては上映作品を集めた。そして13年前、東京のラフォーレ原宿で第1回フェスティバルを開催。若者で長蛇の列ができる人気ぶりだった。世界中から作品を募集し、審査員による選出と観客の投票で優秀作を決める現在の映画祭のシステムは、2004年(平成16)には米国アカデミー賞公認映画祭に認定され、グランプリ受賞作は次年度の米国アカデミー賞短編部門の候補作品になるまでに成長した。

また、石原慎太郎・東京都知事の発案でアジア部門も併設されることになった。そして、10周年記念事業として映画館を新設するにいたる。

「ファンから常設館を望む声が増えてきたこと、横浜市が映像関連の事業を誘致していたことなどがきっかけです。横浜は学生時代、仲間と演劇論を戦わせた場所。海に向こうを感じる未来志向の土地になじみがあったし、格好の街でした」

タイミングとコンセプトが合致し、横浜に新たな風を吹き込む装置が完成した。

暮らしや文化を楽しむシネマトラベル

「学生時代から、将来は世界中の人たちと感動を共有したいと考えてきたので、実現できて幸せです。映画祭やこの映画館からクリエイターが生まれたら楽しいなあ。ここでよくコーヒードrinkしながら脚本を書いたんだよ」とかね

映画館は、みなとみらい5丁目のBrillia Grande みなとみらいパークフロントタワー内の商業施設「フィルム」の2階にある。ハワイエにはカフェがあり、手描きのPOPが楽しい。映画を鑑賞するシートは、カンヌ映画祭のそれと同じフランス製で、すわり心地は抜群。日常からワープできる空間として演出されている。

「好きな時間に気に入った作品を、スナック感覚で味わってください。気軽に知らない国を旅して、暮らしや文化を楽しむシネマトラベル」ができますよ」

当初、別所さんは映像作家志望者や映画ファンのにぎやかな情報交換の場になることを想像していたが、シネマ育ちのシニアたちが多く訪れた。うれしい誤算だった。「映画と連動したイベントや結婚式にも貸し出しています。季節のパーティーや町内会の会合など、地元のコミュニティサロンとしても、どうぞ」

映画の街としての 伊勢佐木町よ、再び

横浜みなと映画祭プロデューサー／映画監督

中村高寛さん



見る機会が乏しい若手監督の作品を上映

今年の3月、横浜で新たな映画祭が幕を開けた。その名は「横浜みなと映画祭」。全12作品上映という小さな規模ながらも、日本の映画興行の発祥の地でもある「伊勢佐木町の復権」を掲げたイベントだ。プロデューサーを務めた映画監督の中村高寛さんは次のように語る。

「かつて伊勢佐木町は、日本でも指折りの映画の街だったんですよ。日本で初めての洋画封切館のオデオン座をはじめ、たくさんの映画館がこの街にありました。ところがいまや、映画館はわずか3館しか残っていません」

この映画祭は、主に2つのパートで構成された。ひとつは、海外では高く評価されているものの、国内では上映の機会にあまり恵まれない日本の若手映画監督の作品を見せること。

「映画監督として海外の映画祭をいろいろと回って、たくさんの日本の若い無名の映画監督と出会いました。でも、おもしろい映画を撮っているのに、国内ではほとんど知られていない。商業的な理由で、映画が上映される機会が少ないんです。そこで私と同世代の監督を紹介し、サポートできないものかと思ったんです」

映画の街・伊勢佐木町を思い出してほしい

そして、もうひとつは「ハマシネ」と名付けた、横浜で撮影され、横浜を取り上げた作品の上映だ。

「たんに映画を見せるだけでなく、トークショーやイベントも開催しました。映画を入口に、より横浜の魅力を伝えられる場にしたかったんです」

なお、映画祭は準備期間が短く、宣伝や告知があまりうまくいかなかったという反省が残る。だが、中村さんは手応えも実感できた。映画監督の林海象らをゲストに迎えたイベントは、満員になったほどだ。

「自治体や企業、伊勢佐木町の商店街の協力も得られました。ただ、今後も街の人たちが応援してくれるとは限りません。これから、地元の人たちがこの映画祭の意義をどう感じてくれるのか、鍵はそこだと思っています。このところ、横浜在住であっても、伊勢佐木町にまだ映画館が残っていることすら知らない人が増えているんですよ。そこで一年に一度、映画祭を開いて、映画の街としての伊勢佐木町を思い出してもらえれば」

自分のために、作品の上映場所を守りたい

これほど伊勢佐木町にこだわるのは、

他でもない。この街の映画館で浴びるように映画を見て、その道を志したからだ。

「以前はハシゴして映画を見ることができた街だったんですよ。それが、私にとつての映画の原体験。それから、映画監督としての第一歩を踏み出したのも、伊勢佐木町なんです」

中村さんのデビュー作は『ヨコハママリー』。白塗りの厚化粧をしてドレスに身を包み、横浜の街角に出没する老娼婦に関するドキュメンタリー映画だ。この映画がはじめて上映されたのは、伊勢佐木町にあり、横浜みなとみらい映画祭の会場にもなった横浜ニユーテアトルだった。

「あの映画は伊勢佐木町の街と一体化した作品なんです。見終わって映画館から外に出ると、メリーさんが歩いていった街並みが現れるんですから」

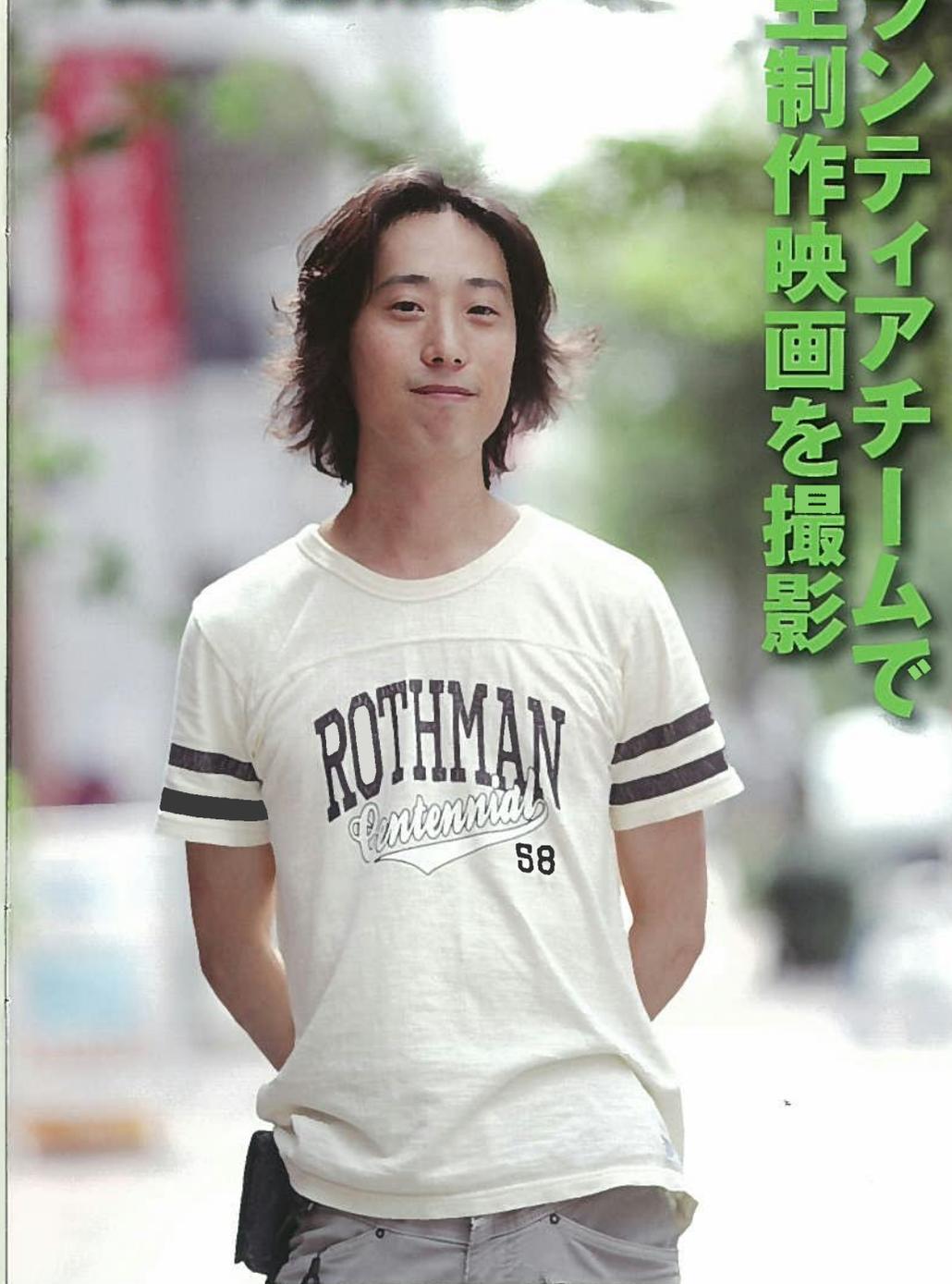
今、中村さんは来年の3月に開催予定の映画祭第2弾の準備に追われる。そのかたわら、新作の撮影も続く。横浜で生まれ育った93歳の禪僧のドキュメンタリーだ。

「今後も、横浜で気になったことや人を撮り続けたい。映画祭は、街のため、若手映画人のためという面もあるけど、実は自分のためでもあります。私の作品は横浜の街で発表してこそ意味がある。だから、自分の作品の上映場所を守りたいんです」

ボランテティアチームで 自主制作映画を撮影

やまけん組代表／映画監督

山岸謙太郎さん



刑事ものサスペンス映画を横浜で撮影

昨年、山岸謙太郎さんの監督作品『イヤータグ』が公開された。半分近くが横浜で撮影されたサスペンス映画だ。

「黄金町をはじめ、あちこちで撮りました。イセザキ・モールや野毛のラーメン屋さんにもご協力いただきました。ただ、何しろ猟奇殺人ものなので、嫌がられたこともたびたびありましたけど」

その映画は、二人の刑事が連続殺人事件を追うストーリー。薄暗い路地やうらぶれた廃墟、ネオンなどが随所に登場する。

「もともと、主に横浜で撮影されたテレビドラマ『あぶない刑事』が好きだったんです。いつかは横浜の街で刑事ものが撮りたいなとずっと考えていたんです」

残念ながら撮影許可が下りなかった建物もある。そうした場合、山岸さんは横浜に似た雰囲気を持つところを探し、撮影にこぎ着けたと振り返る。

「横浜には日本っぽくない古い建物が多くて、『いったい、ここどこだろう?』といった独特の無国籍風の雰囲気があります。そこが気に入って。ですから『イヤータグ』を撮影するにあたっては、念入りにロケハンしましたね。横浜抜きには成り立たなかった映画なんです」

高校生や会社員、主婦らが映画に取り組み

この映画がユニークなのは、内容だけではない。既存の映画関連会社に頼らず、制作や上映は「Project Yamaken」や「やまけん組」が主体となって実行されたことだ。

やまけん組とは、山岸さんみずから率いる自主制作映画チームのこと。高校生から50代までと年齢層は幅広く、学生や社会人、主婦など多様な人たちが主に土日を利用して、映画の撮影に取り組み。

「最初は8人でスタートしました。それがいまでは、名簿上では80人くらいのメンバーがいます。まあ、実際に活動しているのは20〜30人くらいですけど」

やまけん組は2000年(平成12)からスタートし、これまでに約10作の映画を制作してきた。大半の自主映画制作グループは、作品が完成しないまま活動休止に陥ることが多いなか、これほど長く継続したケースは快挙だといえる。

「長続きした理由は、『みんなでがんばろう!』といった感じがいつさいないからかもしれません。『がんばれる人は、がんばりましょう』と、お気楽に続けてきたんですよ。関わるスタンスも人それぞれで、『終電なので帰ります』という人もいれ

ば、次の日に仕事があるのに朝まで付き合っただけの方もいます。もちろん、メンバーは流動的に入れ替わりが多い。ただ、立ち上げた時から関わってくれている人が、ぼくの他に2人いますね」

自主映画にもっとエンターテイメント性を

山岸さんの第6作目『キヲクドロボウ』は、賞に輝くなど話題となり、国内外で公開された。卒業後はWEBデザイナーで生計を立てていたが、それを機に、最近では映像関連の仕事が増えつつある。

それでも山岸さんは、やまけん組の活動をやめるつもりはない。自主制作映画で脚光を浴び、やがて商業映画の監督になったケースは少なくないが、山岸さんはその道をあえて選ばない。

「商業映画の依頼はありますが、ぼくみたいになかなか低いです。自分の撮りたいものはなかなか撮れません。作りたいものがあるから、自主制作映画チームを残しておく必要があるんですよ」

自主制作映画といえば、文学的で高尚な作品が大半を占める。ところが山岸さんの方向性はまったく異なる。

「もつとエンターテイメント性のある自主制作映画もあっていいはず。SFアクションを自分で撮りたいんです」

完成後も撮影を続ける、 海岸通団地のドキュメント

映像制作者

杉本暁子さん



解体され、風化する団地暮らし

横浜・馬車道の延長線上と海岸通の交差する万国橋の横に位置するのが現在解体工事中の海岸通団地だ。

馬車道といえは、横浜でも指折りの人気観光スポットのひとつだが、半世紀前、その先にある海岸通沿いは倉庫とその事務所があるくらいで何も寂しいエリアだった。そんな場所に公団住宅が建ち、入居が始まったのは1958年（昭和33）のことだった。総数460戸。都市部で働く中流サラリーマン向けの公団住宅として建設された。

半世紀が経過して解体中の海岸通団地跡には、北仲通北地区再開発計画として、最終的には新たな建物が建設される見込みだ。住人たちは全員すでに退出し、いま団地は空家の状態だ。

「この団地は、抽選で仕方なく入った人がほとんどなんです。でも、長い間、住んでると当然、愛着もわく。それなのに建替えが行われる。高齢者が住む場所を変えることが、いったいどれだけ大変か。これは誰にでも起きうることで、多くの人が共感できるテーマだと思っ」

そう考えて一本のドキュメンタリー映画に仕上げつつあるのが、杉本暁子さんだ。

市民講座で映像制作を学ぶ

「横浜の歴史を語るつもりは、まったくありませんでした。しかし、海岸通団地の過去と現在を伝えることで、図らずも団地と街の歴史になってしまいました」とあっさり語る杉本さんだが、元々は映画人ではなかった。

「もともとZAIM（現在は閉鎖）やBank ART1929といったアートのペースに関心があつて、横浜にはよく足を運んでいたんです。とくに好きなのが馬車道の街並み。ある日、その先にある万国橋のもとにある海岸通団地が気になって、敷地内に入ってみたのがきっかけなんです。足を踏み入れると静かで、雰囲気がいい。中庭は本当に憩いの場といった感じで、なごめました」

その頃、杉本さんは会社勤めをしながら、映画を撮りたいと市民向け講座で学んでいた。そんなとき、出会ったのが、海岸通団地とその住人たちだった。杉本さんは、これをテーマにしたいとインターネッ

トのオークションで揃えた機材を一人で抱え、毎週末、馬車道に通うことになる。「住人の方からは警戒されましたよ。でも、通ううちに次第に打ち解けるようになってきました」

団地の最後を見届けたい

撮影開始は2008年（平成20）6月。それから10ヶ月もの間カメラを回し続けた。「でも映画って、どうすれば完成させられるか、知らなかったんです。それで映画学校に入って完成のさせ方を学び、先生方から助言をもらい、力づくで完成させました」

題して、『海岸通団地物語』そして、私たちの人生は「つづく」。だが、完成させたものの、今度は発表の方法がわからない。公募コンテストに出したり、上映会を開いたりした。団地内の自治会の集会所をはじめ、横浜や東京など約10ヶ所で自作を披露した。

「団地内での上映は、とてもにぎやかでした。ね。何かの記念写真を見る雰囲気そっくりで、『あら、わたし写ってるわー』といった感じでした。団地のそばにあるコンビニの店員さんや、かつての住人が見に来てくださったり。懐かしいという声も聞かれました。とりわけ、横浜港の『除夜の汽笛』が聞かえるシーンは好評でした」

杉本さんは、去年の2月横浜の住人となった。そして、週末の団地通いを続けている。「団地の姿を最後まで撮り続けたい」からだ。完成の目標は来年夏。それまで彼女に休みはない。▼

言葉を添えることで、 映画制作に立ち会える

シネマトークの会／弁士

植杉賢寿さん



社員として働きながら、休日には弁士

かつて、出演者の声や音楽などがまったく無声映画（サイレント映画）があった。この映画に華を添えるのが弁士だ。いまでも衰退した職業ではあるものの、意外なことに現在でも日本全国に約10人ほどの弁士がプロとして活躍している。また、他の職業を続けながら、休日に弁士の活動をする人も少なくない。

植杉賢寿さんもその一人。会社員として多忙な日々を送りながら、横浜や茅ヶ崎などで弁士として人前に立つ。植杉さんが弁士を始めて約20年が経ったが、きっかけは学生の頃に遡る。

「弁士については知らないという方が多いと思いますが、ぼくもそうでした。それが、初めて弁士に接して衝撃を受けてしまつて、伊勢佐木町には横浜オデオン座という1911年（明治44）に開館した映画館があったのですが、そこで無声映画を弁士つぎで上映するイベントがあったんですよ。それを見て、いたく感激したのが始まりです」

植杉さんは、その上映会で手に入れたチラシに興味を抱く。それは、無声映画の専門会社であるマツダ映画社による話術研究会のビラだった。

「さつそく入りましたよ。発声練習から始めましたね」

話芸よりも重要な台本はみずから執筆

無声映画全盛期も現在も、あらかじめ用意された弁士用の台本など存在しない。弁士みずから執筆するのだ。仕事を終えてから、植杉さんは約2時間の映画のためにおよそ1ヶ月を費やして台本を仕上げている。植杉は、話芸よりも台本を書くことのほうが重要なんです。物語の筋や、監督がいわんとしていることを観客にわかりやすく伝えられるかどうか、それは台本にかかっていますから。いったん書いては読み直して、これはいい、と削る作業ですね」

せりふを削ぎ落とすことに神経を注ぐのは、痛い経験から学んだことだ。それは弁士デビューの時、上映作はチャールズ・チャップリンのコメディだった。「べつまくなしにしゃべったら、誰ひとり笑ってくれなくて。喜劇のはずが、悲劇ですよ、もう。それで、話しすぎるのはよくないと反省したんです」

また、チャップリンの映画は大好きだが、弁士としては、もっともやりづらいタイプでもあると植杉さんは語る。

「基本的にドタバタだからわかりやすいし、誰が見ても説明なしに理解できます」

だから、言葉を加えるつもりは台無しになりがち。チャップリンの面白さを損ねず、メッセージを言葉に変換して語るのが難しくても、難しいからこそ楽しい面もありますね。客の反応をうかがいながら、臨機応変に修正していくんですよ」

弁士だからこそ、映画のライブ感覚

長い間、弁士の活動を続けてきたのは、自分の性格に合っているからだ。植杉さん。「ぼくは恥ずかしがり屋のくせに、目立ちたがり屋でもあるんですよ。映画館は暗いうえに、観客のみなさんはスクリーンを見ていて、弁士を見る人はいません。だからたくさん人の前に立っていても、あまり恥ずかしくない。それに、ぼくに注目してほしいとは思っていません。主役はあくまでも映画ですからね」

さらに植杉さんは、弁士の魅力について言葉を続ける。

「古い作品なのに、映画の制作に立ち会う喜びがあるんですよ。もちろん、すでにできあがっている映画ですが、弁士が言葉を添えることで完成される。その瞬間に居合わせるのがうれしい。いわば、映画はライブなんです。年に一度、弁士をする時は、とくに映画のライブ感覚が味わえて刺激になりますね」

映画好きによる、映画好きのための映画祭

ヨコハマ映画祭実行委員会代表
鈴木たけしさん



スポンサーをつけず、市民主体で開催

1980年(昭和55)以来、毎年2月に世にもまれな映画祭が開催されている。市民が主体となって開催し、スポンサーをいっさいつけない「ヨコハマ映画祭」だ。鈴木たけしさんが仲間の映画ファンに声をかけて始まり、今年で33回目に達した。

「映画祭の運営は、自治体や企業からいかに助成金を集めるかが重視される。でも、ぼくらは入場料収入とパンフレットの売上げの範囲内でずっとやってきました」

この映画祭では、多くの映画ファンたちが投票で年間ベストテン作品や、俳優監督、脚本家らの個人賞を選ぶ。

「何のしがらみもなく、映画ファンが好きに賞を贈りたい。このことだけは変えたくないから、スポンサーをつけないんです」

よってこれまで、大手の広告代理店や企業から支援の申し出も何度かあったものの、きっぱりと断ってきたのだ。

むろん、鈴木さんをはじめ、スタッフは全員ボランティア。

そればかりか、受賞者にも賞金はおろか、交通費さえ出ない。

とはいえ、選ばれた人たちがこぞって授賞式に訪れる映画祭。それがヨコハマ映画祭なのだ。

緒形拳や北野武、高倉健らも授賞式に出席

たとえば、第1回の主演男優賞の受賞者は緒形拳だった。当然映画祭の存在は知られていなかった。

「ご自宅にお邪魔して、映画ファンが差し上げる、名誉も権威も伝統もない賞なんですとご説明したら、『だからうれしんじゃないですか』と喜んで下さって」

また、北野武は「なにかと政治がらみの賞が多い中、実に公平」と評した。一方、新人監督賞を逃した松田優作は大いに悔やんだ。ヨコハマ映画祭はこんなエピソードに事欠かないが、極めつけは高倉健だ。1982年(昭和57)、高倉は『STATION』で映画祭をほぼ総な

め、第3回目のヨコハマ映画祭でも特別大賞を受賞した。だが、新作映画が北海道で撮影中のため、すべての授賞式を欠席、ヨコハマにも出る予定はなかった。ところが、悪天候でロケが中止になり、突

然、高倉は飛行機に乗って駆けつけたのだ。この大ハプニングに驚喜する各席に、高倉はこう言った。

「ヨコハマの空気を吸いたくて、やってきました」。この年、高倉が出席した授賞式はこれひとつ。これが話題となり、ヨコハマ映画祭の知名度は一気に高まった。

運営の危機を救った思わぬ臨時収入とは？

ヨコハマ映画祭は30年以上に渡って続いていた。その間、横浜の映画環境自体はスタート当初とだいぶ変わってきたと鈴木さんは見る。

「横浜の映画環境は東京依存型でした。映画館側からすると、地味な秀作には客が集まらなと嘆く。一方、ファンにいわせると、東京のミニシアターに行った方が早いとボヤク。そんな悪い状況でした。それが最近、ジャック&ベティさんなど意欲的な劇場の頑張りでかなり改善されました。われわれが外野席の隅っこでワアワア騒いできたのも無駄ではなかったのかなあ、という自負も少しはあります」

30年の間には、運営の危機も生じた。「赤字が蓄積して、もうこれまでかと思うこともありましたよ。すると、思わぬ臨時収入に恵まれました」

長年の映画祭開催が評価され、ヨコハマ映画祭は1998年(平成10)に第47回横浜文化賞奨励賞、2000年(平成12)には第22回サントリー地域文化賞を受賞。予期せぬ賞金が転がり込んできた。

「財政がまずくなると、なぜか賞をいただけで、映画の神様が続けると言っているのなら続けるか、といった感じですね」

踊る海 踊る港に立ちつくす 秋の人魚は十七歳半

水原紫苑 写真 矢部志保

ダンス・ダンス・ダンスの横浜にやってきました、十七歳半の人魚姫は、踊りの輪に加われずに立ちつくすばかり。
海のおるさとは捨ててしまっし、探し求める王子様もないのです。でも、心配は要りません。左胸のうるこがびくと動いたら、誰よりも生き生きと踊り始めるはず……
その時、やつと王子様がやって来ても、一緒に踊ってあげないから……

みずはらしおん 歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集「ひあんか」「雲入まらさし」「くわんおん(観音)」「いろせ」「あかるとん」(著作)世阿弥の臺「星の因縁」「京部つた物語」などを発表。現代歌人協会賞受賞、駿河梅花文学賞、河野愛子賞など多数受賞。

やへしほ 写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学専攻卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地熊(師事)独立。渡辺貞夫のミニコンプレックスを多く撮影している。

1対1の会話ができる、 他にはないラジオの魅力

光邦さん パーソナリティ



みづくに
1976年(昭和51)、東京都生まれ。東京コミュニケーションアート専門学校卒業。主にラジオ番組のパーソナリティを中心に、テレビ番組のナレーションやイベントのDJなどでも活躍。FMヨコハマの番組『tre-sen』に出演。2006年(平成18)からは横浜F・マリノスのホームゲームでスタジアムDJを務めている。

●緊張感が心地いい、生放送のおもしろさ

F.Mヨコハマの夜の人気番組、『tre-sen』(トレセン、19時〜22時)。月曜から金曜までの毎日、光邦さんはパーソナリティを務める。

「やっぱり、生放送はおもしろい。天候やいろいろな状況によって、話す内容に軌道修正が必要になったりしますからね。つまり、蓋を開けてみないことには、どう転がるかわからない緊張感、それが心地よくて。だから生放送は、自分のテンションも高まるんですよ」

この番組を担当して今年で7年目。だが、いまだに試行錯誤が続くと語る。

「毎日毎日、自分の中にあるものを出すわけですから、当然、大変です。アウトプットするためにはインプットが欠かせませんから、いろんなものを吸収することにいちばん時間を費やしてますね。映画に行ったり、ライブを見たり……」

番組のリスナーは学生が中心。だが、放送の時間帯のせいもあり、学生だけではなく限らない。小学生から70代の方まで幅広い層に支持されている。

「さまざまな人たちを相手しながらも、ラジオはメールやはがき、電話を通じて1対1の会話ができる。つまり、他のメデ

ィアにはないコミュニケーションが可能なんです。これは、ラジオの魅力のひとつだと思いますね」

●中学を訪ねて、お昼の放送をジャック!

その一方で、「最近ではラジオの使い方も知らない若者も増えているんですよ」と光邦さんは顔を曇らせる。そこで光邦さんと番組のスタッフたちは、数年前からアクションを起こした。

「学校を訪問して、ラジオをもっと聞こうという運動を始めたんです。たとえば、月曜から木曜日まで毎日、中学校の放送室に向いて、お昼休みの放送をジャックしたり。局から機材は持ち込まず、学校にある機材だけでどれだけのことができるか試してみたいんです。リクエスト・ボックスを置いたところ、けっこうメッセージが届きましたよ」

とはいえ、そもそも光邦さんが放送の世界に入ったのは、大きな誤解がきっかけだったと笑いながら振り返る。

「クラブでレコードを回すDJになりました。かっただけですよ。で、高校3年生の時、たまたま雑誌でDJを養成するコースがある専門学校のことを知り、よく調べもせずに申し込んだんです。そしたら入学式の挨拶で『ラジオが好きで入学してき

たみなさん』と言われて、違うDJだと初めて気づいたんですよ」

●週末はF・マリノスのスタジアムDJ

なお、週末は横浜F・マリノスのホームゲームでスタジアムDJを務める。

「日本最大規模の競技場で何万人ものサポーターに向けて語るのには、やはり気持ちいい。Jリーグの中でも熱いサポーターが多いチームですから、選手を紹介するたびに歓声がわき、掛け合いもできますからね。ぼく自身、もともとマリノスのファンでしたから、仕事が決まった時はうれしかった。いつそう横浜に根ざすことができますからね」

この10月には象の鼻パークで開催される『ヨコハマアコフェス2012』に出演する。N・U・が呼びかける音楽祭だ。

「みずから志願してMC(司会)を務めることになりました。前から手伝いたいと思っていましたが、F・マリノスの仕事でかなわなかったんです。N・U・の魅力は、ファンとの距離が近く、とてもファンを大切にしているところ。ぼくは仕事柄リスナーと触れあう機会は少ない。だから、番組でリスナーに『このフェスティバルにみんなで集まってくれ』と呼びかけてるんですよ」▼

社会貢献活動として 音楽イベントに関わる部活

木村剛さん

横浜市立桜丘高等学校教諭



きむら ごう

愛知県名古屋生まれ。横浜国立大学卒業。7年前から横浜市立桜丘高等学校に教諭として勤務。担当科目は地学、生物、化学。顧問としてSBC部を指導する他、進路指導も担当。

<「ヨコハマアコフェス2012」開催概要>

10月14日(日曜)象の鼻パーク開港の丘午前11時開演。入場無料。出演=N.U.千綿偉功TAKUMAほか。

<http://yokohama-acofes.com>

●軽音楽部目当てで学校を選んだ新入生も

横浜市立桜丘高等学校は、部活動が盛んな高校として知られる。中でも、ユニークな活動を展開しているのが、SBCという名の軽音楽部である。顧問を務める木村剛先生は語る。

「部員は3学年合わせて70人弱。13バンドに別れて、日々練習しています。手前味噌かもしれませんが、練習環境は恵まれていますよ」

校内には、練習用のスタジオが4つもある。もちろん、アンプやドラムセットもちゃんと揃っている。それだけではない。約120人を収容できるホールがあり、音響と照明などの機材はちよつとしたライブハウス並みだ。

「高校内の施設としては、このホールは県内はもちろん、国内でも有数だと自負していますね。年に5回開催するライブでは、会場設営、つまり音響や照明機材のセッティングも、そしてその操作も生徒みずから行います。楽器演奏だけじゃなく、トータルに取り組むんですよ」

また、夏には、プロのミュージシャンたちもよく利用する福島のスタジオ兼宿舎で3泊4日の合宿も実施した。

「これだけ熱心に活動しているので、最

近は『SBCに入りたいたから桜丘高校を選んだ』という入学者もいるほどです」

●教育に重点を置き、部活動に徹する

だが、このSBCで学生たちは、好きなようにバンド活動ができるわけではない。バンドのメンバーは生徒自身か選べず、木村先生が決めるのがルール。メンバーチェンジも先生の意向だ。

「好きなようにやりたいなら、学校以外の場所でバンドを組めば済みますからあくまでも部活動ですので、バンドを通して学ぶことに重点を置いています。楽器を演奏したり歌ったりすることは、とても気持ちいいことですので、自己満足に陥りがち。では、人前で発表すること、つまり表現を理解してもらうためには、何をどうすればいいのかを考えることが肝心です。ですから、ライブに力を入れているんです」

また、練習には課題曲もある。

「生徒任せにすると、流行りものばかり選びますから。もちろん、課題曲の他は生徒が好きな曲も演奏できます。中にはオリジナル曲をつくる生徒もいますね」

●運営スタッフとして学外イベントに協力

一方、学外での活動にも積極的だ。た

とえば、保土ヶ谷区内の学生バンドの祭典「ほどがやバンドバトル」に出場し、優勝したバンドもある。このイベントではSBCの生徒たちはボランティア・スタッフも務めた。

また、この10月に象の鼻パークで開催される『ヨコハマアコフェス2012』でも、SBCの生徒たちが運営を手伝う。このイベントは、横浜を中心に活動中のフォークデュオ、N・U・の呼びかけで始まった音楽祭。今年で3回目を迎えるが、1回目からSBCは関わってきた。しかも、会場の設営や観客の誘導など、重要な役割を任されている。

「文化事業に携わる社会貢献活動であると同時に、生徒たち自身も充実感を覚えているようです。普段は見られないプロのステージの裏側が見られますから、『またやりたい』『楽しかった』などと口々に言っていますね」

なお、名古屋で育った木村先生は、大

学から横浜に住み始めた。「入学したのは1991年。横浜ランドマークタワーがちょうど建設中で、戸部に住んでいたのが、街が変革していくさまを目の当たりにできましたね。いま41歳なので、名古屋より横浜のほうが長くなつちやいましたよ」▼



小学生エコ教室
 8月1日(水)横浜美術館において、環境教育イベント「小学生エコ教室」を開催しました。
 このイベントは小学生に「エコ」を楽しく学んでもらうために開催したものです。2部構成で第1部はお子さんと保護者80組174名が参加して、環境省から日本唯一環境パフォーマーの認定を受けたeco実験パフォーマーのらんま先生による「エコ実験パフォーマンスショー」を開催しました。手品やジャグ



横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを実践する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業を展開しています。同倶楽部は「横浜の価値を高める各種の活動」を行うことを主目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介します。

リングなどを交えながら、らんま先生が環境問題についてわかりやすく解説しました。

第2部には32組77名が参加し、横浜美術館子ども導のアトリエ指導員による指導のもと、色画用紙やマジックを使って、個性あふれる環境ポスターを制作しました。完成したポスターは当金庫の本店営業部、反町支店、瀬谷支店の3店舗に展示して、地域の皆様にご覧いただきました。

キッズ・マネースクール

8月3日(金)当金庫本店にて小学4〜6年生と保護者の方を対象に、①信用金庫の仕事②営業室の見学③1億円の重量体験④偽造防止技術の紹介⑤お札の数え方⑥お小遣いゲームの体験プログラムを中心とした「キッズ・マネースクール」を開催しました。
 当日は34組72名が参加され、①信用金庫の仕事では、信用金庫の三大業務である



預金、貸出、為替についての授業を行いました。②の営業室の見学では、普段入ることができない営業室内を見学していただきました。③1億円の重量体験では子どもたちだけでなく大人も1万円札で1億円分を梱包したものを手にして、その重みを実感してもらいました。⑤お札の数え方では練習用の模擬紙幣を使用して「札勘」(お札を数えること)に挑戦し、⑥お小遣いゲームでは、ゲームを通してお小遣い帳のつけ方を楽しく学んでもらいました。

【表紙 モデル：HADUKI 撮影：mico65】「横浜ルネサンス」の別冊「Jelly Beans Girl〜横浜探訪〜」第2号でモデルデビューした「HADUKI」。彼女は「自分たちで地元を盛り上げよう!」というコンセプトのもと、ヨコハマのふつ々のオンナノコたちを中心に結成された「hamajo (ハマジョ)」と称されるモデルのひとり。現役の高校生でもある彼女は、生まれも育ちもヨコハマという生粋のハマっ子。数年前から「hamajo」で活躍していた実姉の推薦のもと、自らも「hamajo」になったという変わった経歴の持ち主でもある。ヨコハマのオンナノコたちが知りたい、教えたい「今」を情報発信していく「hamajo」で、今後どう活躍していくか期待される。
 ☆「hamajo」ホームページ：http://hamajo.jp



横浜ルネサンス No.20

2012年9月30日発行

発行 横浜信用金庫
 〒231-8466 横浜市中区尾上町 2-16-1
 Tel:045-651-1451 (代)
 Fax:045-651-2303
 http://www.yokoshin.co.jp

編集 / 制作 横浜信用金庫総合企画部
 (横浜ジェリービーンズ倶楽部)
 http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html
 E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp

How To Taste Music In Yokohama.

横浜の聴き方

第13回

『Once Upon a Time in YOKOHAMA』
ダウン・タウン・ブギウギ・バンド



「Once Upon a Time in YOKOHAMA」は、1981年に解散したダウン・タウン・ブギウギ・バンド (DTBWB) が、一時的に再結成した1987年に発表したアルバム『タイム・イン・ヨコハマ』のタイトル曲である。作曲は宇崎竜童で、作詞はもちろん阿木耀子である。

第2回でもちよつと触れたが、宇崎竜童という人は横浜と親和性が高いという印象がある。1980年代前半にテレビ神奈川 (TVK) で『フライング80's』という、当時としては(現在でも)画期的なロック番組の司会をしていたせいかもしれない。少なくとも関西(京都)出身という感じはしない人である。その宇崎が率いるDTBWBの「Once Upon a Time in YOKOHAMA」は、以下のように横浜における定番の地名を思ひきり歌詞に連ねた曲である。

「外人墓地・山手通り・大棧橋・山下埠頭・立ち入り禁止エリアフェンス・本牧 Base Camp・伊勢佐木町 Back Street・黄金町 Down Town・馬車道プロムナード・チャイナタウン・元町アムニエー・海岸通り・桜木町バスストップ」

ご当地ソングには大なり小なりそうした傾向があるが、この曲はこれらの地名だけでほとんど歌

詞が成り立っているところである。小林旭に「自動車ショー歌」(1964年)とどう、車の名前(約30車)をタジャレ風に盛り込んだ曲があるが、「Once Upon a Time in YOKOHAMA」の固有名詞を多用する構成はそれに匹敵するレベルである。ただ「自動車ショー歌」はほとんどコミックソングだが、この曲にはコミカルな要素はない。サウンドはいわゆるエッジが効いていて、宇崎の歌唱もオーソドックスなものである。

この曲の特徴は「横浜ホンキートンク・ブルース」や「FENCEの向こうのアメリカ」などにあるような情緒性がないことである。あの頃の横浜・Once Upon a Time in YOKOHAMAを歌いながらその時代に対する感傷とか郷愁といった要素が欠落していて、作品全体を乾いた感性が支えているという趣きがある。

先に「この曲にはコミカルな要素はない」と述べたが、地名とともに何度も繰り返される「Everybody was Teddy Boy」や「フライング」などはシャビに近く、それだけで通俗的な印象を与えないのは、この曲には(あの頃の横浜)をなつかしむというステロタイプな発想に対する批評性があるからだろう。ラストの「Once Upon a Time in YOKOHAMA City ああ頃は幻」と「フライング」は安易な(横浜幻想)自体を否定している。「横浜ホンキートンク・ブルース」や「FENCEの向こうのアメリカ」などとは異なるスタンスで横浜を歌った良質な作品だと思う。(中島久)



横浜観光プロモーション認定事業

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。

WE HAVE THE BANKBOOK OF JELLY BEANS.

Model: HADUKI / ALLy (hamajo)
Photo: mica65

横浜のニックネーム《Jelly Beans》をデザインした
ジェリービーンズ通帳 & カード



ジェリービーンズ通帳



ジェリービーンズカード

横浜信用金庫

<http://www.yokoshin.co.jp>



《よこしん》では、地域社会の発展に貢献したいと、金庫内に「横浜ジェリービーンズ倶楽部」というプロジェクトチームを組織して、「横浜の価値を高める」ことを目的に各種の活動を企画・実施しています。同倶楽部の活動は、横浜観光プロモーションフォーラムの認定事業にもなっています。